

今年の夏にIFLAの大会が東京で開かれる。そこでは図書館史のラウンド・テーブルが持たれることになっている。個人の立場で、図書館史研究会のメンバー3名が「日本における図書館史研究の現状と課題」という論題で発表することになった。石井敦（東洋大学）、河井弘志（立教大学）、川崎良孝（椋山女学園大学）の3名である。各自が持ち寄った原稿を、川崎が所定の枚数にあわせるために修正・削除した。ここでは、修正や削除していない原文のままを、掲載することにした。勿論、研究論文ではなく、啓蒙的なものであるが、会員からの批判をいただくと幸いである。（なお、発表者はふえる可能性もある）

日本における図書館史研究の現状と課題

石井 敦 （東洋大学）

河井弘志 （立教大学）

川崎良孝 （椋山女学園大学）

日本における図書館史研究は決して活発とはいえない。ここでは、ドイツ、アメリカ、日本図書館史研究の現状と課題について概観しておく。

第一節 ドイツ図書館史研究

日本にはドイツ図書館史専門の研究者がなく、ドイツ図書館制度に関心をもつ者が歴史にさかのぼって研究した論文が散発的に発表されるだけで、研究相互間の連絡も乏しい。

ドイツにおける図書館史研究は、Georg Leyh当時の学術図書館史からJohannes Langfeld以後の公共図書館史に主導権が移行し、「民衆図書館運動」史、「路線論争」史などの運動史、思想史の研究が盛んになり、先年Wolfgang Thauerらの公共図書館史がまとめられ、更に第三帝国下の公共図書館における検閲の歴史など、現代公共図書館史の研究も多くの成果をあげているが、これらの動向も日本では部分的にしか取り入れられていない。

従来の研究の中でみるべきものといえば、ドイッチェ・ビューヘライ史、現代公共図書館史、人物研究、図書館学史、相互協力活動史などの諸分野のものがとりあげられる。

山口卓郎は、Helmut Rotzsch, Heinrich Uhrendahl, Curt Fleischhack, Fritz

Schaafらの研究によりながら、1912年に設立されたドイッチェ・ビューヘライの歴史を、前史から説きおこし、成立・発展の過程を通して、ドイツ民主共和国期の役割変化と活動の多様化に至るまでの長期にわたる一館史の形にまとめあげた。先行研究と比較して特に新しい分析や発見があるとは思えないが、従来日本で殆ど知られていなかったドイッチェ・ビューヘライの壮大な歴史の全容を紹介した意義は評価されてよい。

河井弘志は、日本における「図書館の自由」にかんする諸問題への示唆を求めるために、第三帝国下のドイツ公共図書館における検閲の歴史を、1933年の焚書公共図書館における検閲の実態、検閲にかかわった諸機関・諸団体、および大学図書館の状況の諸側面にわたって、実証的に研究した。Dietrich Aigner, Friedrich Andrae, Johannes Jungmichlなどの諸研究、アメリカ人Martha L. DosaのGeorg Leyh研究などによりながら、Bücherei誌に掲載された記事論文で補いつつまとめたもので、これも多くをドイツにおける先行研究に依存しているが、個別研究を関連づけながら時代の全体像を描き上げたという意味で、一定の評価が与えられるであろう。

平野美恵子は、第二次世界大戦以後の西ドイツにおける図書館法制定にかんする文献レビューをおこない、特に『図書館計画 '73』をめぐる肯定否定の意見や、10年後のハノーファー大会における総括評価を詳しく紹介し、更に1975年のバーデン・ベルテンブルグの「継続教育および図書館制度振興法」を、その後の停頓状態、公共図書館界の批判的意見、文部大臣を対象とするアンケート調査などにふれながら、立体的に評価した。西ドイツ公共図書館の現代の動向への鋭い観察があり、現代公共図書館史の一つの見方を提起している。

人物研究は比較的生産的であった。菊池租はMartin Lutherの図書館建設建白書を翻訳し、またGottfried W. Leibnizの図書館思想を考察し、そのUniversalismusにたいする椎名六郎の解釈を批判した。Friedrich Nestlerは、Arnim Graeselが図書館界で忘れられた存在となっていることを嘆いたが、河井弘志はこの人物をとりあげ、原資料にあたりながらその伝記をまとめ、あわせて19世紀後半から20世紀初頭のドイツの図書館運動の流れを概観した。そのほか、Friedrich A. Ebertの人物紹介、彼の『図書館員の自己修練』の邦訳なども、河井をはじめとする人々の手で行われた。

人物研究というより、ドイツの図書館学理論の思想的流れを巨視的にたどったのは小倉親雄である。すでに、大佐三四五、椎名六郎らは、Martin Schrettinger以後の図書館学の著作を個々に紹介したが、小倉はSchrettinger, Ebertから

Graesel, Fritz Milkau, Georg Leidingerにいたる図書館学の歴史の中に, Library Economy的な実務主義図書館学と, 図書館学をも包摂する広域図書館学という二つの流れを見出し, 特に前者の流れは, 究極的にフランス人Gabriel Naudéまでさかのぼるとして, 欧米諸国の図書館学を共通の源流に結びつけた。Wieland Schmidt などの図書館学史研究にはこうしたアプローチはなくアメリカ図書館学から出発してヨーロッパ図書館学にさかのぼり, Library Economy の思想の源流を極めようとした小倉の研究の独創性というべきであろう。

Peter Karstedtは『図書館社会学』の第一章で歴史社会学を論じ, 図書館史の社会学的方法に投石をなしたが, 蒲池正夫はこの中の「社会学の立場」の構想を紹介し, 近年では加藤一英と河井弘志がそれぞれに紹介と論評を行い, 1970年には両名の手でKarstedtの第二版の全訳が刊行された。図書館史の社会史的アプローチにおおくの示唆を与えてくれるが, 法社会学的傾向が強くと, Lorenz Waligoraが批判したように, 歴史発展の法則を欠いていることもあってか, わが国の図書館史研究への直接の影響はまだ見出されない。

日本の図書館運営は専ら英米図書館学に導かれて発展してきたので, 実務面でドイツから受け入れたものは皆無に近いが, ドイツの総合目録と相互貸借制度の与えた印象は強烈で, これらを歴史に遡って紹介したものがいくつもある。丸山昭二郎と平野美恵子は, 『プロシャ目録規則』の英訳版の序文その他の文献によりながら, 19世紀末のベルリン王立図書館の総合目録事業の発足と展開, ドイツ総合目録への切り換えと中断, 戦後の各州総合目録の成立と現況, さらに19世紀末以来の相互貸借サービス史, 特別収集分野計画の流れを概観した。ドイツの全国図書館協力の歴史的流れも要領よく紹介している。齊藤雅英にも同種の論文があるが, 歴史研究とはみなしがたい。(つづく)

専門用語 和独対照表 (省略)

文献一覧

- 山口 卓郎 ドイツチェ・ビューヘライ成立の背景 『学会年報』22(3), 1976
ドイツチェ・ビューヘライの発展, 1913 ~1916 *ibid.* 23(2), 1977
ドイツチェ・ビューヘライ, 1916年から第二次世界大戦の終結まで
ibid. 24(2), 1978
第二次世界大戦のドイツチェ・ビューヘライ, *ibid.* 25(2), 1979
河井 弘志 第三帝国と図書館(1) ~ (4) *ibid.*, 24(2-3), 25(1), 1978-79
平野美恵子 西ドイツの図書館計画と図書館法 『図書館史研究』2, 1985
菊池 租 マルティン・ルーテルの図書館建設建白 『図書館学』28, 1976

- 菊池 租 G.W.ライプニッツの図書館思想 『図書館学』37, 1980
- 河井 弘志 A.グレーゼルの生涯(1)～(5) 『図書館界』25(4),26(1-4),
1973-74
- 小倉 親雄 ドイツにおける図書館学思想の形成とその起源
ibid., 23(3), 1971
マルチン・シュレッチンガーにおける図書館の構想
『京都大学教育学部紀要』21, 1975
図書館学とビブリオテクノロジー ibid., 22, 1976
- 蒲池 正夫 図書館成立の「社会学的立場」について 『図書館学』19, 1971
- 加藤 一英 P.Karstedtの図書館思想 『私立大学図書館協会報』64, 1975
P.Karstedtの図書館歴史社会学 『学会年報』21(1), 1975
- 河井 弘志 西ドイツの図書館学論 ibid., 21(2), 1975
- 丸山昭二郎・平野美恵子 ドイツにおける総合目録を中心とした図書館協力事業
(1)～(2) 『参考書誌研究』11～12, 1975-76

* 第15回運営委員会は、1985年12月20日(金)午後6時より、東京池袋の滝沢で開催した。出席は、阪田蓉子、川崎良孝、工藤一郎、油井澄子、河井弘志、石石井敦、寺田光孝、是枝英子。

『図書館史研究』(第三号)、1986年度セミナー、1985年度収支報告・事業報告、1986年度予算案・事業計画案などについて話あった。また、雑誌の長期的な編集方針について考えること、および3年を経過した時点での本会の総括とこれからの展望などについて、突っ込んだ論議をする必要があるとされ、今後の課題とすることにした。

* ニュースレターに掲載する短文をもとめています。内容は、

図書館史にかんする書評・論評

諸論文の紹介・検討

その他 図書館史にかんすること

枚数：400字詰め原稿用紙(横がき)10枚程度

受理した原稿については原則として次回のニュースレターに掲載する

送付先は 事務局(梅花女子大学)です。

昭和60年度事業・収支・監査報告, 昭和61年予算・事業計画など

1. 昭和60年度事業報告
2. 昭和60年度収支および監査報告
3. 昭和61年事業計画
4. 昭和61年予算

1	昭和60年度事業報告
---	------------

1. 第三回「図書館史を考えるセミナー」の開催
昭和60年9月8日(日), 9日(月)の両日, 東京の大東文化会館にて開催。参加者は53名。
2. 図書館史研究会 ニュースレターの発行
 1. 第16回ニュースレター 昭和60年1月30日
 2. 第17回ニュースレター 昭和60年4月20日
 3. 第18回ニュースレター 昭和60年7月18日
 4. 第19回ニュースレター 昭和60年10月18日
3. 機関誌『図書館史研究』(第二号)の刊行
昭和60年8月 日外アソシエーツから発売
4. 運営委員会の開催
 1. 第11回運営委員会 昭和60年4月6日 東京 水道橋
 2. 第12回運営委員会 昭和60年6月22日 東京 池袋
 3. 第13回運営委員会 昭和60年9月9日 東京 大東文化会館
 4. 第14回運営委員会 昭和60年11月10日 名古屋 椋山女学園大学
 5. 第15回運営委員会 昭和60年12月20日 東京 池袋

2	昭和60年度収支・監査報告
---	---------------

(収入の部)

会費	1,000円×124人	124,000
セミナーの剰余金		33,155
寄付など(会費前納を含む)		7,000
昭和59年度からの繰越金		97,482

計 261,637

〔支出の部〕

事業費	ニュースレター作成・発送代	63,250	
事務局費*		35,400	
昭和61年度への繰越		162,987	
	計	261,637	

*事務局費の内訳	振替手数料	2,900	} 小計 35,400
	事務局長交通費	20,000	
	通信費	12,500	

昭和61年1月15日、会計検査を行いました。その結果

- (1) 各項目についての運用は適切と認めます。
- (2) 各種帳票の整備、帳票記載事項が、正確適切であることを認めます
以上報告します。

昭和61年1月16日

監事 稲村徹元 印

監事 竹島昭雄 印

なお昭和60年度の会計年度は、昭和60年1月1日から60年12月31日迄

3	昭和61年度事業計画・組織運営
---	-----------------

A. 事業計画

1. 第四回「図書館史を考えるセミナー」の開催
夏期、2日間、京阪神
2. 図書館史研究会 ニュースレターの発行 5回程度
3. 機関誌『図書館史研究』（第三号）の刊行
4. その他、本会の目的に沿い必要とされる事業

B. 組織運営など

1. 運営委員 森 耕一 (京都大学) 阪田蓉子 (梅花女子大学)
 山口源治郎 (名古屋大学大学院)
 川崎良孝 (椋山女学園大学)
 藤野幸雄 (図書館情報大学) 石井 敦 (東洋大学)
 寺田光孝 (図書館情報大学) 鮎沢 修 (聖徳学園短大)
 是枝英子
 工藤一郎 (東京大学図書館) 油井澄子 (国立教育研究所)
- 役 員 事務局長 阪田蓉子
 研究委員会 森耕一, 山口源治郎, 川崎良孝, 阪田蓉子
 編集委員会 藤野幸雄, 石井 敦, 寺田光孝, 鮎沢修,
 是枝英子
- 監 査 渡辺信一 (同志社大学)
 竹島昭雄 (神戸市立中央図書館)
2. 事務局 梅花女子大学文学部 阪田研究室内 図書館史研究会
 3. 年間会費 1,000 円

4	昭和61年度予算
---	----------

〔収入の部〕

会 費	1,000円×140 人	140,000
昭和60年度からの繰越金		162,987
	計	302,987

〔支出の部〕

ニュースレター作成代	年5回として	80,000
事務局費		60,000
内訳 封筒2,500枚 など消耗品	20,000	
事務局長交通費	30,000	
通信費	10,000	
予備費		162,987
	計	302,987

従来と変化した点についての説明

1. 運営委員の大幅削減

前年度の運営委員の数は18名であり、今年度は11名と7名削減した。会成立当初は、本会の方向づけについてなるべく多様な意見を参考にすること、さらには会の存在を知っていただく必要もあり、会の規模にしては多数の運営委員を擁した。一方、3年を経過した時点で、効率的運営をめざす意図から、運営委員を削減した

2. また、従来、編集委員会、セミナー検討委員会（本年度から研究委員会）は運営委員がしめていたが、各委員会委員に会員から参加していただき、より開かれた委員会組織にすることにした。

3. 事務局長が阪田蓉子にかわり、それに応じて事務局は梅花女子大学に移動した。連絡先がかわりましたので、御注意下さい。なお、事務局の住所・電話番号などは封筒を御覧ください。

4. 従来、事務局業務とニュースレター作成・発送業務は一括して前事務局（椋山女学園大学）で処理していた。今年からこの業務を分担することになった。すなわち、事務局業務とニュースレター発送は事務局が担当する。川崎良孝は事務局員としてニュースレター作成を担当することになった。

5. 59年度と比較して、60年度事業費が約3万円減になっているが、これはニュースレターの発行を2回へらし4回にしたためである。61年度は、5回を予定している。

6. また、60年度と比較して、61年度の事務局費が25,000円増なのは、事務局の移転にともない新たに封筒を作る予算が15,000円、それに事務局長交通費を2万円から3万円に上げたことによる。

* 昭和61年度の会費を納めてください。同封の振替用紙を御利用ください。なお年間会費は昨年と同じ1,000円です。会運営上支障を来しますので、早期の振り込みをお願いします。

(文責 川崎良孝)

住所変更

第四回 図書館史を考えるセミナー (予告)

テーマ 「図書館思想の受容」

日 1986年9月14日(日), 15日(月)

場所 大阪府勤労者憩の家 みのお山荘

} 予定

詳細は次号以下のニューズレターで報告する